

關東を凌駕する  
關西の婦人  
運動熱

(三) 大正十年七月十七日

時

專

新

報

第一萬三千六百四十六號附錄

(四) 報第廿三號



啄木鳥  
幸男さん  
永代美知代

「さあもうおめめをつぶつ

て、お羽巧たこー」  
斯うお祖母様がお蒲團を叩いて、降りてらつしやるさ、幸男さんはたつた一人で二階のお座敷で寝なければなりません。

幸男さんはこれまで一度も一

人つきりて他所のお家へ泊つた事なんぞないんですけれど、お家の都合で、今度お祖母より一足さきにお祖母様のお家に来たのです。

「母様もあさからすぐ行きますからね、お祖母様におんまりお世話をやかせてはいけませんよ、あなたが羽巧ださ、母様までさんなに讀められるか知れないのよ、ね、屹度よ、屹度お羽巧になさいね、幸男さん」

母様は幸男さんをお俵に乗せてしまつて後までお祖母様の有るのでした。

でも、幸男さんは淋しくつてしよ、がなけれ、泣きません、幾らベソをかきさうにしたつて大丈夫泣きません、そして廣いお座敷の床の中であつたひざり、泣くもんか、泣くもんか、齒を喰ひしはつて、氣張つて居りました。

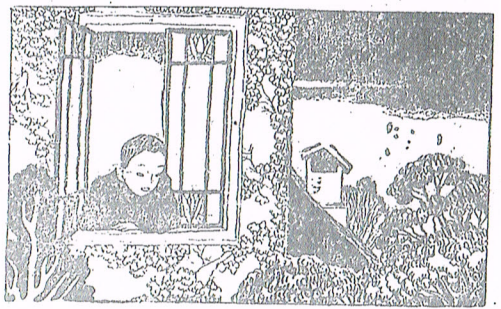
幸男さんはビツタリ枕にお顔を押し付けて、泣聲を立てまいとしました。でもお家の枕と違つて、お祖母様のお家の枕は大きくつて、高くつて、しまひに頸根つこが痛んで來ます。おまけに電氣が云つたら、先刻お祖母様が降りてらつしやる時、わざと暗い二層にしておしまひなので、幸男さんはホッテリ、マンザリおめ、を開いて居るさ、淋しいよりも怖くつて、お家の母様のところへ飛んでも歸りたい氣がします。

でも、でも幸男さんはじつと堪へて居りました。そしてその間のながいこと、もう朝になりさうなものか、またかしら？ 幸男さんはじれつたくつて、じれつたくつて、幾度さなく膝がへりをうちました。

オヤツと思ふさ、幸男さんは自分でも知らないうちに座敷を見えて、誰かに呼ばれて居りました。

「ハイ、今起きます」  
くろりお座敷の上につき上りました。が、さうやら呼ばれたと思つたのは夢のやうなので、幸男さんは又座敷の中にもぐり込みました。

「コッ、コッ、コッ」  
成程昨夜のは啄木鳥が斯う思ふさ幸男さんは笑術しました。さ、啄木鳥は赤い頭を振つて、今一度嘴を楯のやうに打ちました。



「僕起さるのよお祖母様」  
幸男さんは大急ぎで寢間着を脱ぎました。そして一人でチャシと着物をきかへると、下座敷へ降りようとしたが、まあ如何でせう、お廊下はまだ真暗で、お家の中はシャーンとして静まり返つて居りました。可哀相に幸男さんはお部屋へ引返すより仕方ありませんでした。

「オヤまあ此兒は、お祖母様もたれたまんまおねむつてゐる幸男さんをめつてお祖母様がお呆れなすつたのは、それからもう三時間も経つた後でした、お祖母様は幸男さんの頭を撫でながら、靜かに仰有いました。

(元)